

大正八年一月一日

毎年の例に無く今年は五時に起き出て朝湯に飛び込み身体を清めて上ると漸く夜が明けてきて心地よく、随ていつもよりも餘程早く屠蘇を飲み、雑煮を食って一同と新年を賀することが出来た。家内一同も大体に於て無病息災にて年を越し、経済上の状態も最近一年餘り中々昇給やら割増手当やらにて収入の増したる為に、物価の著しく高騰せるにも拘らず昨年比して多少裕和されたるが如し。午前中は、年賀状など認め午後より近所へ年賀に廻り、例年の例に因り、酒井家へ年賀に至る。今年も年賀の辞を交わす。其の中珍らしく驥、酒井家に来たれしかば一同は加納、岡田に行き立寄りて驥と別れ弓町古市氏宅に年賀の辞を述べて帰宅。朝飲みたる屠蘇一杯の為か、後頭部に多少頭痛を感じず。今夜は時候の近來になく暖かりし為か、身体が非常に熱く汗をかいた位である。珍しく早寝した。

大正八年一月二日

昨夜来如何にも身体が熱かったので若しやと思ひ体温を見たところ、別段熱がある模様もなければ安心して例の如く水浴をやる。殆ど用なければ、ゆっくり年賀状など認む。午後になって又近所二三軒年賀に行く。頭痛は不相変あり。屠蘇の酔にしては少しひつつこいと思つて居つたが、其の上時々悪寒あり。若しやと思ひ体温を見たところ三十七度五分にして正しく風邪に罹つた様子なり。思へば昨夜湯殿で一時間程かかって三人の小供を洗つて多少温かい湯にはいった為である。昨夜身体の燃ゆる様に感じたのも其の為で、之を覚らずに外所に出歩いて居つたのをわるければ、今日測つた体温の測りたくないであつたのにもかまわず、水浴をやつたりしたのが結局わるかつたのであろう。用心の為に早速床を延べさして寝た。寝る前発汗剤として式年振りかにて玉子酒を作つて飲みしも何等の効果なし。

大正八年一月三日

新年始めての好天気なれど、床上にある身には何の役にもたたない。洋薬は副作用のあるに依り、多少利目はわるくつても漢薬の方をやって見ようとして妙ふりだしを求めて来て飲む。例に依り熱はあつても気分も食欲も平常通り、唯頭痛がするので時々悪寒があるのとが違うきりである。午後になって小池尚治、斎藤鉄両氏年賀の為に来訪。一時間程之が相手になつた為か、熱は三十八度七八分上つた。明日の御用始めには是非とも出たいので大事をとつて再び牀上に横つた。

大正八年一月四日

元氣は引き続きなかつたが気候は中々に寒く、殊に風も多少あり一時は役所へ行くのを見合わせようと思つたが何うせ今日は出ても十一時に会議室に集まつて挨拶がある丈なので少し暖かくなつた十時頃、制服に着替へて出掛ける。此の時の服装は毛袍衣三枚、毛皮チョッキ、制服、外套という姿にて生れてから始めての厚着で、殆ど身動きにも苦しむ位であつた。十一時会議室で副総裁の挨拶があり、

一同と年賀の辞を交換して直に帰宅して再び床上に横はる。体温昨日と同じの約三十九度に近し。連日服用の漢薬も何等の効果なきに依り、明日瀧口医に診察を乞ふこととす。

大正八年一月五日

朝、瀧口医師来診。粉薬のみ呉れる。午後、篠宮が年賀に来たので又一時間程相手に出る。此の時分、気分は中々良く、前日来痛める頭痛も去り、悪寒もなく、体温を測りしに三十七度を示せり。矢張漢方の薬は利かぬものであることがわかった。熱がなくなったので、夕飯は起きて普通の食事を探る。この時に体を冷したものが、夜になって測りしに亦もや熱は上って三十八度を越した。之では明日の登庁は如何のものか案ぜざるを得ない次第である。

大正八年一月六日

今日も不変頭痛はすれど食欲はあり、熱は漸くに増すばかり。遂に遺憾ながら役所の方は欠勤することとした。夜に入り発熱三十九度二分になる。瀧口医師は十三日頃まで他出して帰らぬとのこと、此儘放任する訳にも行かず、誰か他の確な医師の診断を受け度いと色々考えた末、結局東京鉄道病院の副院長井村医学士に来診を乞ふことにした。

大正八年一月七日

下の室は騒々しい為、病床を二階の座敷に移す。三時頃、井村学士来診の結果、流行性感冒にして既に多少肺炎に変わじて居るので安静臥床することを要し、尿便等も褥中にて採るべしとのことなり。夜になり驥来訪時に体温三十九度九分になる。其んな有様でも兎らと自宅にては充分の養生も出来ず、因て断然明日入院することに手配を決めた。

大正八年一月八日

正午過、寝台車来りしが、病褥に横臥したまま車の中に運びこまれ順路一時半許りかかって芝公園内の鉄道病院に到着。其所にて擔架及足搬車に移され看護婦多勢かかりて二階二等室に入院。ここには病褥は二箇あれど一個は空席なので大に好都合なり。早速依頼して置いた附添看護婦七時になりて来る。熱不変高く殊に今日は入院の為に身体を動かした為に多少病状があしくなったようである。看護婦と交替で倫子帰宅。夜になって父上見舞いに来る。

大正八年一月九日

熱は昨日よりは多少下りたれど三十九度を下らず。食事は粥を取りしも、菜は不消化のものに非る限り何でも良しとのこと、可なり沢山食う。倫は朝食を済まし(て)から病院に尋ね来り。夕食後まで居って帰る。

大正八年一月十日

八九の両日、極めて少量の便通ありたる限りなるを以て、今日浣腸をして多量に便通あり。気持も大に快くなった。

大正八年一月十一日

食欲不相変あり。之は何より結構。夕飯には食麵包を牛乳に浸して食べて見た。

大正八年一月十二日

肺炎の方は日増しに軽快に赴きつつあれど熱は一向に下らず。夕飯麵包にバターつけて食う。少し味あれど瓦斯の火で焼くので一向思った程うまくなし。左腕上膊に発泡薬を塗布す。

大正八年一月十三日

病状意佳良なる由なれど熱一向に下らぬ為、医師は或は他の病気を併発し居るものに非ずやと疑ひ、速くも研究中なり。今日浣腸に依りて便通あり。昨日の発泡剤に依り局部発泡し危局に之あり皮膚に浸出せる液を試験管に取って行く。之にてキザネ病名を解ける為なるべし。

大正八年一月十四日

医長の回診あり。肺炎は略快癒したる由に付き胸部の湿布を除く。

大正八年一月十五日

今日は今までの主治医の代りに他の一医員来診。余を見て東京大学の在学中一緒にテニスをやったことがあるとて良く自分を見知ってる様な。余は速くに其の誰なるやを思ひ出そうとしたが、何しても解らない。其の診察の結果に依って多少チブスの疑があるので、午後になり急に病室を階下の隔離室に変更した。この室は狭けれど前の室に比べて返って閑静なり。夜、酒井谷平が見舞に来る。夕方より水薬少しく変り、解熱剤たる丸薬は廃せられた。三十八回の誕生日に当れど、こんな有様にて何の微意もなし。

大正八年一月十六日

午後右腕関節より血液採取した。多分之に依りて血漿を作りて病気の種類を確定するのであらう。浣腸に依り便通あり。

大正八年一月十七日

今日午後「ビスケット」二三を口にしつつあるところに渡辺先生回診。「パラチブス」の疑あるに付、午後食物は一切流動食を採ることとなったので「ビスケット」の如きは食っては不可とのこと。肺炎漸く治ったと思つたら「チブス」とのこと。一難去つて一難来り。ふつうなれば大に悲観するところであるが自分は「チブス」の如き病気にて死ぬとも思わず、幸に心臓は丈夫であるから別にそれほど案じても居ない。唯少し在院の期日が永くなる丈で後では反って身体が丈夫になるということを聞いているので反って嬉んだ位である。殊に「チブス」患者の恢復期には殆ど不可制の食欲の為に悩まされると云うことであるので、ここで一つ自分の制欲の試験をして見ようとの気もあったので、家人共の青くなつて心配して居るに拘らず、自分は一向に平気であった。本日より食事左の通り

朝、重湯二合 卵二 晝、「オートミール」一合 牛乳一合

夕、重湯又は牛乳一合 「スープ」一合

外、一日分 牛乳一合、玉子四の「アイスクリーム」

大正八年一月十八日

今まで使って居った看護婦余り勉強して呉れないので予め取替へたいと思って病院の方へ頼んで置いたところ漸く、代りが出来たので今夜交替す 今度のは二等看護婦にて少しは気が利いてるやうである

父上喘息の為倫子来院出来ぬ由 宅にての御完了の喘息なれば例の「アストラ」が能く利く筈であり且つ人手も免じてあり来院出来ぬ程のこともあるまい 少し怪しい点もあった

大正八年一月十九日

今日又宅からの消息に依れば父上の病気大分よき様なれど未だ今日も倫 来院出来ぬと 二日も続いてそんなこと有るべき筈ない 或は倫自分が病気にやられてるのであるまいかと疑念起つた 因て色々質問の結果愈本人病気と自白した 浣腸に依り便通あり

大正八年一月二十日

午後父上見舞に来る 推定の如く倫 先達より発熱烈しく来た 就寝中なので来られぬなりと余り熱も高きがらないので若しや自分の病気は毎日看護して居た為「チブス」伝染したのであるまいか 一家で二人大黒柱がねられては家中は真暗なる上 果して戦費が続くや否やも疑問で多少心配になつて来た 今日午後渡辺先生に往診を依頼する手続きをすましたとか 自然便通多量に有り

大正八年一月二十一日

午前回診の際「アイスクリーム」の量を問われたるに実際採取せし通り答へしに夫れは多過ぎる故半減して牛乳五匁卵二個分を一日分とせしとの話なり 尤も前述量は予け書付を以て先生に他の食事と共に許し得たものである 午後便通ありしが便の中に始めて粘液多量にあり 腸「カタル」を始めたとか 依て絶食して之を緩和するべく命ぜられ晩には僅少行くの番茶を飲んで行くに止まる 頃日来睡眠稍不足の気味なり しく以て今夜睡眠薬を飲みしも効果なし 倫は昨日渡辺先生診察の結果普通の感冒に止まりし由にて安心した

大正八年一月二十二日

今朝も絶食して少許の番茶を採りしのみなり 昼には重湯五匁、晩には同一合、卵一個を食す 昨日まで毎日三十九度以上の熱続きしこと十六日に及びしも今日は何れも三十九度以下に下り愈熱の下りかける時期が到来せしものと思はる

大正八年一月二十三日

予て十日以前に叢疱を採取した傷痕漸くに治癒す 朝昼毎食重湯一合、卵一個宛、晩重湯一合、卵二個を食す 今日より睡眠薬を毎食後飲む一寸飲みにくき薬であるが熱は引続下りつつあり

大正八年一月二十四日

軟便中量あり 昨日より服用せし睡眠薬は肝要の夜間には余り利かず反て日中終日眠く身体はだるく気持あし 食後一時間睡眠薬を飲む
臀上に辱傷生じ円座を作りて之を敷いたので大に凌ぎ能くなった
食事今日以降毎食重湯一合五匁、卵二個分に一日「スープ」一合とす

大正八年一月二十五日

午前中速くに睡眠を催し堪え難く睡眠薬の為なるり以て反って心地あし
今日より食事中一回は重湯と同量の葛湯に代る
体温又々下降し今日は朝六時の体温より反って三時の体温の方低くなった位である 明日は尚一層加工すること信ず

大正八年一月二十六日

先日より引続き気持ちのよき程日々低下し気分も頗る宜し 四回の驗温何れも三十七度台に止まりしは始めてなり 渡辺先生回診の際此の分では今月末までには平熱に復すべしとのことなり
数日前より右頸部に小なる腫物出来容易に治らず 漸く大きくなり且つ疼痛も増して来りしを以て今日外科の回診を乞ひして碌々見もせず湿布すべきと言ひ捨てて帰る 随分不親切なる診察なり

大正八年一月二十七日

軟便あり不杞憂 粘液交じる由にて昼夕食共卵を廃す
倫 頃日来の病氣全快して始めて見舞に来る 昼より腸加答児（カタル）の為なるか散葉一日三回飲むこととなる 熱は益低下し四回の驗温とも何れも三十六度台なり 依って今日より氷嚢を廃す 今夜頸部の腫物多少疼痛を感じ

大正八年一月二十八日

食事は今日も亦三食共卵を採ることを止む 但し重湯中に葛を入れて濃くして飲むことを得た 頸部の腫物益痛み出したるを以て 夕刻外科の回診を乞ひして明日切開するとの由に鞞定をした 之が為か今日は比較的熱が高かった

大正八年一月二十九日

午前頸部腫物の切開を為し大に心地よくなった 昼より水薬の処方少しく変わる軟便あり 熱も全く平常の如くなる 二十二日より急に降り八日目の今日になって平熱に復した
食事は昼より重湯又は葛湯二合又は「オートミール」一合牛乳五匁に一日卵黄二個「スープ」一合に増加す
水仙の花漸く開き蘭花枯れ寂寞なり

大正八年一月三十日

熱益下降したれば今朝より氷枕を取去り大に気持よくなった 軟便あり 夕方隣室に看護婦長入院 大腸加答児の由なり 病院の看護婦は勿論其他の出入極めて繁く 且つ就寝時間を過ぐるも尚話声絶へず 折角閑静なりし室もめちやめちや

なり
水仙引続き開花芳香室内に満つ 此外「シネリヤ」一鉢求め来り 室内多少見彩を増せり

大正八年一月三十一日

昨日来便通絶へず催し気味にて気持あしかりしも今朝便排出して以来腹に含軽快となり心持極めて好くなつた
晩飯より重湯の中に飯粒若干混る
体温の高低の有様全く常態に復したるが如し 夜になり始めて電燈を消して就寝す 其の為か比較的よく睡れた

大正八年二月一日

腹具合前日と同様に好く 熱も亦同じ
支那水仙の花満開 見事なり

大正八年二月二日

今朝の体温三十六度まで下り平生より低きが如し
尚治が夜になり遅く「ウェーハー」持参して見舞に来る
食事は毎日店何時日の数を増し 四五日中に粥食となる由なり 今日より卵黄四個を食す

大正八年二月三日

朝便通ありいつもより少しは堅けれど不相変粘液あり
一月下旬大連□朝夷が中風を病み居る父の大靈道に依りて治癒せんことを望めるままに同伴上京の途に就きしが本日午後病院に見舞に来る 七年振りに久々の対面なるを以て互に膝突き合して懇談夜を徹すべき筈なるが不幸にも生憎かかる病院の中に在る者の如何ともすること能はず 横臥したまま談話を交え久し振りのことにて中々に談は面白く一時より四時頃まで話して帰る 二十日頃まで滞京の由に付夫れまでは退院自宅にて閑談することが出来様かと思ふ 叔父も以前よりも進迫と病気は進んで行くやうなれど未だ兎に角近いところには独で歩行するには差支なき程度なりとか
役所の方は昨日まで欠勤の手続きをすまして置いたので今日また更に四週間即ち来月二日まで欠勤の旨診断書を添付して届出づ

大正八年二月四日

朝便通あり昨日より稍軟かである 晝飯は「オートミール」を二合に増す
今日は節分にて賄部屋にて賄方の頓狂なる声を出して豆撒するのも聞えて可笑し
今晚より暖房中止され多少寒くて大に閉口した

大正八年二月五日

今日は渡辺先生休みにて久しぶりにて橋口先生回診おまじりになってから最早一週間許りにもなるので何か午後菓子でも食はして貰ひたひと思つてきき合したところに中々大事を取つて許さず強いてと云へば「シュークリーム」の皮をとつ

て「クリーム」だけ位なればよからうとのことで 余り馬鹿らしければ それならば食はず 折角今日から「ウェーファース」でも食はうと思つて居つたので大に失望した

午後久しぶりにて父上見舞に來たので二時間程愉快に世間話をかはず所が三時の驗温突如三十七度に上り体温始めて変調を呈した 今朝も暖房通らず寒くて困つた 室内三十五度

五六日前より尿量減ぜしが復今日あたりまた増して來た

大正八年二月六日

昨夜より今朝にかけて暖房再び通ひ御蔭にて大に助かる

今朝便通あり 形をなせど粘液は例の如く在り 十時頃江沢甚一氏見舞に來る

朝食は重湯の中に飯粒大匙に十杯全然粥同じ 昼飯の「オートミール」も止めて朝晩と同じ食物を採る

午後になって渡辺先生回診 昨日までの食事問題始めて解決 明日より粥を食することとなり且つ今日午後より初めて「ウェーファース」を食することを許され早速二枚を食ふ

今朝体温三十五度九分に下つたので此の分では心配なしと思ひ居りしに晝より急に上がり出し終に三時の体温三十七度を突破し夜になりて下るべき筈なるも反つて上り容態稍變ず 頃日来腕の肉瘦せたる為に驗温器を挟むも充分にしめつけたること出来ず従つて体温正直に示すこと難き憾あり

大正八年二月七日

今朝体温少しも下らず其の原因不明なり 回診の結果何等心配する点なしとのことにて先づ安心

晝飯より名義粥となりし為 分量半減して一合となり大に空腹を感ず 卯日□共五個を食す

大正八年二月八日(MG 5518)から同年三月二十一日まで省略

大正八年三月二十二日

入院中の「レコード」なり 御前榊原久太郎氏見舞に來る 今朝の尿量七〇〇〇瓦蓋し入院中の「レコード」也 午前倫子供三人連れて來院 十一時入浴終つて從來病室にて着用せる服全部を脱ぎ捨て宅より持参の服に衣替へ 之にて全く生れ替りたるが如き心地した 之によりて始めて隔離室を出て体重を測りたるに僅に九貫七百五十匁しかなく最健康の時に比べて約三貫目の減量なり 之に依つて本月初旬の如きは八貫位しかなかりしものなるべし 午食後病院内を巡覽し夫々世話になりたる人々に厚く礼を述べ 二時自動車にて退院 小供等及倫共自動車は今回が始めてにて大悦びなり 約三十分にして帰宅 久しぶりで娑婆の風に吹かるるも中々に愉快なり 帰宅後暫くの夕飯までに皆座敷に床を延べさせ休みしも夕飯後は兎ても寝る気にもならず 九時過までも起きて床に就きしも寢床の變つた為か割合に眠られなかつた 在院七十四の間

大正八年十二月三十一日

大正八年回顧

顧れば実に本年は我家にとりて無比の悪歳であった。元旦の始に日記にも記した通り昨年末よりして家庭の状態も大体佳く経済の方も物価騰貴に連れて俸給も上り手当も付き殊に年末の賞与は予想外に多く凡て上首尾なるを悦びしも哀れ束の間。元旦早々より流行性感冒に罹り尚肺炎を併発したので遂に一月八日東京鉄道病院に入院。其後一週間許にして肺炎は治癒したが熱一向に下らず血液検査の結果パラチブスとの診断を受け実に三十八回の誕生日たる一月十五日に隔離室に移され知友渡辺医学士の懇切なる治療を受け。チブスとしては順当に熱も下って行った途中アイスクリームの食過より腸加答児を起し便通の都度粘液を排出し容易に平癒せず遂に一月二月も病蓐に臥し三月に入りて稍快方に向へるが如く同十日には就蓐六十余日にして起立して歩行し出し一同を驚かしめ又チブス治癒期に際する不可制の食欲と常時戦ひつつ首尾よく之に打勝ちこれに依りわが肉体及精神の健全なる証左を示し得たのは聊か痛快であった。斯くて在院七十四日にして再び我が家の人として在ることを得た。この間倫子の殆ど寢食を忘れて看護に努め一時は遂に同じく感冒に罹りて自宅に病臥したることなどありて我一家にとりては実に未曾有の災難たりしなり。併し幸にして全治し一週間自宅にありて静養したるに止り三月末日から登庁した。五月六日には近親の人数人を招きて病氣全快の祝宴を催す。病後食欲も盛ん身体の恢復も著しく。テニスも例の通りやってみたが膝関節の具合が多少悪しく何うも病前の様に敏活なるモーションを取ることができぬやうで時々マツチなどへも顔を出したが自分ながらあきるる許り拙にして兎ても従来肩を竝べた連中と同様に駆け廻ること覚束なく何うやら落伍したやうである。七月には横須賀に於て挙行されたる地中海遠征艦隊の凱旋観覧式に横浜より金剛に。陪乗して式場に至り観覧。捕獲独潜水艇も亦此の式に列し実に痛快を極めた。同月末には狩谷等の周旋にてぬ沼津に行き海岸の某家の二階を借りて夏休に小供共を遺すことにしたところ愈々出掛けることになったところに菊子消化不良を起したので同末日大学病院に入院せしめた。こんなで結局沼津行は無期延期といふことになり小供等大に失望。八月末小供共を連れて鎌倉に行き海水に浴させる。大悦びに一日を費して帰宅。漸く之にて沼津行の中止の補をしてやった。九月初に東京鉄道病院外科に至り膝関節を診てもらったが別段外部に何等の異状ないとのことなり。十月には四郎。大塚信民氏長女元子と結婚の式を挙ぐるべく帰京。同十二日の挙式夜芝公園三縁亭に於て披露の宴を張る。同月半に再び鉄道病院内科にて膝関節の診察を乞ひしに同じく何等異状なしとことにて余り要領を得ない。併し何うも具合は好くない。十二月初め越後地方へ出張し雨に遭って少しく咽喉を痛め引続風邪気味にて殆ど年末まで癒らなかつた。十三日には忠に出生。思ひ通り男児にて結構なれど同時に倫子大腸加答児をおこし中々病状重きやうにて実に閉口。折角看護婦を雇ひ入れても横着な奴にて何にもならず。其の不注意よりして再度までも赤坊を氷らしかけたりしたので一週間許りで返してしまった。倫子も発熱の模様にて或は室扶斯かとも思ひ何處かへ入院させやうとまで考へたが之も一週間許りで大体平癒したので漸く愁眉を開いた。今年の年末賞与は病氣欠勤約三ヶ月にも及んだので甚だ少く僅か四万九十五円にて昨年よりも尠なかつた。冷水浴は病後身体の稍恢復するを得て始めたが先達の風邪以来一時中止して居ったので再び年末になって開始した。御用修の日に高等官五

等五給俸の辞令が下りたので之で漸く一人前の高等官となれた訳である。恩給も朝鮮在勤の加算ある為め此の八月より規定の年限に達したので之で何時首を切られても其の点に於ては予て前年より二割五分の手割ありしが四月より五分となりしも物価の昂騰日に日に甚しく焼石に水にて殆ど何んにもならず経済は努めて節約して漸くにして毎月末の難関を切り抜けてあり。来年より俸給の上った為に多少緩和することであらう。